

鞍馬山より出でまして

辻 憲男（文学部教授）

鞍馬寺から貴船へ下る山道がある。昔、義経が天狗に就いて修行したところという。鞍馬は都の守護・毘沙門天を、貴船は水を司る女神を祀る。深山幽谷には似ず、夏の川床からはしゃいだ人声が聞こえたりもする。

王朝の女性たちもここへ来た。かの和泉式部は「男に忘られてはべりける頃」、貴船川に飛ぶホテルを見て、

もの思へば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる魂（たま）かとぞ見る
と詠んだ。魂が遊離してさまようのか。するとまことや、男の声にて貴船明神が返歌をした。和泉の名は最初の夫の任地（大阪府南西部）によるが、小式部をもうけた後、夫婦仲は疎遠になった。その頃の作だろうか。ところが間もなく、色好みの皇子様から熱愛され、皇子の急逝後続いてその弟宮と恋愛し、世間の評判になった（和泉式部日記）。朋輩の紫式部は、気楽な走り書きの手紙でも和泉の文才は秀でてしていると評した。歌集1500余首の中には、中年以後、尼の身の清少納言と交わした歌などもある。

牛若丸は母・常盤に抱かれて、平家方の虜になった。幼い三児を寺に入れることを条件に助命された。常盤の美しさが清盛を惑わせた。『義経記』の伝によると、七歳から草木を敵に見立てて早業を磨き、平家打倒の志を固めた。一時、奥州平泉の藤原氏を頼ったが、十七歳で京に戻った。五条の橋の弁慶との出会いはその後のことという。

「鞍馬山より牛若丸が出でまして、その名も九郎判官（ほうがん）」の口上は、夏の落語「青菜」の奥方。主人が「義経、義経」と応じる。“菜も喰ろうてしまつて” “よしよし” のシャレが出色。オチはなまじの失敗。



山陰の貴船神社。語源は木生根（きぶね）かという。